巻頭言

早春所感

In early spring

渡辺 久藤*

Hisafuji WATANABE

巻頭言にはふさわしくないと思うが、梅の蕾がほころび始めた今日この頃、新年度へ向けての早春所感を述べてみることにしたい。今年の正月のある日、数人の教え子が拙宅を訪ねてきてくれた。彼等はいずれも現在アルミニウム関係の仕事にたづさわっている人達で、話題もおのずからアルミニウム業界のことに傾いてゆく。ビールを飲みながら、アルミニウムのミニピヤ樽の開発、販路の拡大の苦心談も一興であったが、自動車の軽量化へのアイデア、ダイカストアルミエンジンの不良防止の問題またはアルミホイールの有望性等々…。目を輝やかせて楽しそうに語る若い彼等が、現在も、そして近い将来においても、日本の軽金属工業を支えて行くのであろうことを思い、非常に頼もしく力強く感じたものであった。

それにしても近年の金属工学科卒業生の就職先はどうであろうか。数年前まではわが大学の金属工学科卒業生の4割弱はサッシ、圧延、鋳物やダイカストなどのアルミニウム工業界に進出し、その他は鉄鋼業や金属関連分野に就職して行ったものであったが、この頃では軽金属関係への入社が少ないばかりでなく、金属とは全く縁のないところへ進んで行く学生が増えてきている。このような傾向は、他の国公立大学においても最近とみに顕著になっており、いま各大学共通の問題として取り上げられているところである。

いうまでもなくここ数年来、例のオイルショックによるわが国の第1次、第2次産業の低迷化が、新卒技術者の採用を手控えてきたこともその大きな原因の一つであろうと思われる。これに対して一方では1年間に1万軒もの喫茶店が新設されたり、広い駐車場を持つ外食企業が続々と開店される世相であるといわれているように、いずれこのようなサービス工業を中心とする第3次産業の時代になるという予測もなされている。しかしながら地下資源に乏しく、かつ穀物自給率36%のわが国が未来永劫の繁栄を築き上げてゆくためには、第1次、第2次産業の復興による生産こそがその原動力であり、物を作ってこそ国民の活路が開かれることを見逃してはならない。

幸にしてこのところ永らく困迷の途をさまよってきた産業界も、ようやくその長いトンネルを抜け出ることができたといわれている。アルミニウム製錬業では、産業構造審議会のまとめた安定基本計画が間もなく通産省より正式告示される情勢にあり、またアルミニウム市況もやや好転のきざしが見え、特に圧延、加工部門に伸び傾向があらわれるなど、明るいニュースが伝えられ始めている。しかし最近のイラン情勢の緊迫化で、再び原油供給量が削減されることは火を見るより明らかであり、先進諸国とともに IEA (国際エネルギー機関) の提案に基づく省エネルギー対策の強化が必要であることはいうまでも

* 千葉工業大学教授 (習志野市)。Prof., Chiba Institute of Technology (Narashino).

ない。その意味からしてわがアルミニウム工業界が生産全エネルギーの1割節減を目指して渾身の努力を傾注していることに敬意を表するとともに、軽金属協会としてもかねてよりの省エネルギーキャンペーンの成果をさらに拡大するために、今後も強力に推進して行って欲しいものである。また電解電力を節減するための塩化物電解炉の実用化や運輸、包装部門の大幅なアルミ化、アルミニウム製品のスクラップの回収およびその有効利用等々…。これからの技術開発には時代に即応した多くの問題がまだまだ山積している。このような問題の解決には、いうまでもなく現在の軽金属工業関係が産学を問わず打って一丸となって努力すべきであろうが、それと同時にさらに将来の新しい時代をになってゆく、より若い技術者に対する教育が重要であることはいうまでもない。私自身が金属技術者教育にたずさわっている立場から、今後どんなエンジニアを作り出して行かなければならないかについて愚考をめぐらしてみた。そもそも私は教育の目的とは個人が本来潜在的に持っている能力をより一層有効に発揮できるような途をつけてやることではないかと考えている。高校、大学、大学院とそれ相応に知識のレベルは異なっているとしても、もしその持てる知識、能力を社会に向って発揮できる方法を知らなかったり、習熟していなければ、社会に出ても自分の壁の中に閉じこもった人間に終始してしまい、それは個人にとってのみならず、社会にとっても大きな損失であろう。まして人間の知識や能力には定まった限界などはない。少なくとも大学や大学院を出た者にとっては、社会に出てからもますます自らに磨きをかけて、幅広い応用力を持った人間に成長してゆくことが必要であろう。大学ではこのようにその人間の将来の応用力を考慮し、自らの壁を突き抜けてすべての面に共通する基礎学力の増進に努力をすべきであろう。しかし人間は百人百様というように、学生すべてが同一の学力レベルにあるとはいえないところに教育の難しさがある。特にわが金属工学科においては、金属を第一志望とする学生数が少なく、これは金属系学科を持つ他の大学においても同様な傾向ではあろうが、学生の金属工学に対する志向や基礎学力に相当の格差があることが痛感させられている。そこで学生に対して、従来のような画一的教育をしていたのでは、学力の低い者には自らの壁に小さい穴をすらあけてやることができず、一方学力の高い者にはより大きな将来への見通しを立てさせてやることもできないのではなかろうか。つまり成績のよくない学生を平均レベルまでに引き上げる努力と、優秀な学生に対しては更に一層能力を伸ばす施策とを同時に実施しなければならないということになる。私の大学では目下その具体的教育方法について論議を進めているが、従来から諸般の要望ある社会に、将来はそれぞれの要望に適合した優れた素質を持つ学生を振り向けるよう努力していきたいと思っている。

昨年「中小企業より大学教育に望む」という話のある生産会社経営者から伺う機会があった。話の中に日本の海外への技術協力の推進と、それに伴って現在の中、後進国による将来の追上げへの懸念について述べられ、それに対応するためには中小企業の育成が必要であるとのこと意見であった。したがって大学卒の有望な人材を企業に送り込むことは今後の日本経済を繁栄に導くために不可欠の要件であって、大企業はもとより、中小企業、そして特に軽金属およびその関連業界に送り込めるような有為な人材の育成に努めなければならないと今さらのように心を新たにさせられた次第である。今後私も大学人の一人として、微力をつくしてゆくことは勿論であるが、企業側の方々に対しても、今までより一層教育の一環としての見学、実習などに門戸を開放して頂き、また若い技術社員の方々には学会活動への積極的な参加をお願いして、産業界と大学が歩調を揃えて日本の技術向上を目指してゆきたいと早春に当って心に期しているところである。